

45) 閩山派の信仰については葉明生の一連の研究に詳しい。

葉明生 1999, 2001a, 2001b

46) 『海瓊白真人語録』巻一 (道藏 33.114 下)

47) 葉明生は「瑜伽教」の淵源を唯識瑜伽教派に求めているが〔葉明生 1999〕、『大日經義釈』(大正 no.438)等の用例から、唐代の密教がしばしば「瑜伽宗」と呼ばれていたことがわかる。その淵源は唐代の密教に求めるべきであろう。

48) 註 37 参照

49) 『秘傳眼科龍木論』(民衛生出版社) :17

50) 『秘傳眼科龍木論』(民衛生出版社) :43

51) 『銀海精微』巻下 (四庫全書 子部十三 醫家類一)

52) 研医会図書館蔵写本『江源流大灌頂錦囊眼科秘録』

「眼科諸流派の秘伝書 (2)」『研医会通信』1981 年 11 月参照

<キーワード>『醫方類聚』『外臺秘要方』『龍樹菩薩眼論』『秘傳眼科龍木論』

十 煎藥訣

十一 服藥須知

十二 點眼藥訣

七十二證方論 卷一～卷六

論の中心を占めるのは七十二種の眼病の症状・予後・原因・治療方の詳細を説いた「七十二證方論」である。構成は『龍菩薩眼論』と似ているが、症状等の説明を簡潔にまとめた偈頌が記され、また薬の調合とその服用法を別に説かず、それぞれの症状の項の下に説く特徴がある。

35) 鄭樵(1104-1162)の『通史』には「龍樹眼論一卷」の他に次のような書目が見える。

『通史』卷六十九(四庫全書 史部六 別史類)

審的撰要歌一卷、審的眼藥歌三卷、眼論準的歌一卷、眼論三卷

また揚士奇(1366-1444)『文淵閣書目』には「龍木論一部一冊」の他に次の書目が見える。

『文淵閣書目』卷三(四庫全書 史部四十一 目錄類一)

七十二證眼論一部一冊、七十二證眼科歌訣一部一冊

36) 『能改齋漫録』卷七(四庫全書 子部二十八 雜家類二)

37) 『外臺秘要方』に引用された「天竺經論眼」はこの部分を具えており、地・水・火・風の四大論を説く。ちなみに『スシュルタ・サンヒター』は地・水・火・風・空の五大論を説いている[Suśrutasaṃhitā Uttara Tantra 1.9-10]。

38) 『秘傳眼科龍木論』(民衛生出版社):5

その内容は『黄帝内經靈樞』「大惑論第八十」と酷似している。

39) 『聖濟総録纂要』卷十七「肝虚眼」「目内生瘡」卷十八「目青盲」「將變内障眼」(四庫全書 子部十三 醫家類一)

40) 内閣文庫写本影印版『万安方』卷二十八(『万安方』科学書院,1986):766-767,769-770

41) 内閣文庫写本影印版『万安方』卷二十八(『万安方』科学書院,1986):767

42) 内閣文庫写本影印版『万安方』卷二十八(『万安方』科学書院,1986):791

43) 内閣文庫写本影印版『福田方』卷十(『有林福田方』科学書院,1987):766

44) 『普濟方』卷七十一「肝虚眼」、七十二「腎肝虚眼黒暗」「胎赤眼」、七十四「暴赤眼」「目積年赤」、七十九「將變内障眼」、八十二「外物傷目」「目珠子突出」「蟹目」「目生努肉」、八十三「雀目」「目青盲」、八十四「倒睫拳攀」「目臉腫鞭」「目膿漏」、八十五「目内生疹」。三百六十三「嬰孩頭眼耳鼻門 眼目総論」、四百四「瘡疹入眼」(四庫全書 子部十四 醫家類二)

『大般涅槃經』卷八(大正 no.374)

佛言。善男子。如百盲人為治目故造詣良醫。是時良醫即以金錐決其眼膜(12.411c)

31) *Siddhayoga* 61.148–152 (*Śrīmadvṛndapraṇīto vṛndamādhavāparanāmā siddhayogaḥ*,

Ānandāśrama Press 1894)

nāgārjunapādām añjanam āha

triphalāvyośasindhūttayaṣṭītuttharasāñjanam/

prapaūḍarīkaṃ jantughnaṃ lodhraṃ tāmraṃ caturdaśam//148//

dravyāṇy etāni saṃcūrṇya vartih kāryā nabho ‘mbunā/

nāgārjunena likhitā stambhe pāṭaliputrake//149//

nāśanī timirāṇāṃ ca paṭalānāṃ tathaiva ca/

sadyaḥ prakopaṃ stanyena striyā vijayate dhruvam//150//

kiṃśukasvarasenātha paillyam puṣpakaraktatāḥ/

añjanāl lodhratoyena āsannatimiram jāyet//151//

ciraṃ saṃchādite netre vastamūtreṇa saṃyutā/

unmīlayatyakṛacchreṇa prasādam cādhigacchati//152//

32) *A History of Indian Medical Literature IIa* の *Siddhayoga* の項を参照 : 81-82

33) 『郡齋讀書志』「後志」卷二(四庫全書 史部四十一 目錄類一)

34) 『秘傳眼科龍木論』には以下の出版がある。

接傳紅, 高健生 編 2006 『秘傳眼科龍木論』北京 人民衛生出版社

『龍木論』に相当する首巻から巻六は以下のように構成されている。

龍木總論 首巻

一 審的歌發揮

二 眼敘論

三 三因證治

四 五輪歌

五 內障眼法根源歌

六 針內障眼法歌

七 針內障眼敘法歌

八 小兒歌

九 合藥矜式

25) 『医心方』巻五には「治目清盲方 第十四」の他、「治目膚翳方 第十六」「治眼腫痛方 第二十一」「治目赤痛方 第二十二」「治目淚出方 第二十六」に「眼論」からの引用がある。「治目膚翳方 第十六」の引用は「天竺經論眼」に対応箇所が、「治目淚出方 第二十六」の引用は『龍樹菩薩眼論』に対応箇所が見出せる。

26) 『龍樹菩薩伝』(大正 no.2047)

龍樹菩薩者出南天竺梵志種也。天聰奇悟、事不再告。在乳舖之中、聞諸梵志誦四圍陀典各四萬偈、有三十二字、皆諷其文而領其義。弱冠馳名、獨步諸國。天文地理圖緯秘識及諸道術無不悉綜。(50.184a)

龍樹磨此藥時、聞其氣即皆識之、分數多少鎔銖無失。還告藥師向所得藥有七十種、分數多少皆如其方。(50.184b)

本書は古来鳩摩羅什訳とされてきたが、鳩摩羅什訳あるいは作と見做す事は困難である。この伝承がいつの時代まで遡り得るのかは不明であるが、少なくとも吉蔵(549-623)の時代には、龍樹が天文・地理・図緯・秘識、及び諸道術に通じ、薬術に優れた才能を発揮したとする伝承が成立していた事を確認できる。[山野 2010:68-69]

27) 以下の書目が確認できる。

『隋書』巻三十三 志第二十八 經籍三(四庫全書 史部一 正史類一)

西域諸仙所説藥方二十三卷目一卷 本二十五卷、西域波羅仙人方三卷、西域名醫所集要方四卷本十二卷、婆羅門諸仙藥方二十卷、婆羅門藥方五卷、耆婆所述仙人命論方二卷目一卷 本三卷、乾陀利治鬼方十卷、新録乾陀利治鬼方四卷本五卷 闕

28) 『大唐西域記』(大正 no.2087) 卷第十 橋薩羅國

龍猛菩薩善閑藥術、餐餌養生、壽年數百、志貌不衰。引正王既得妙藥、壽亦數百。(51: 929b-c)

29) 『南海寄帰内法伝』(大正 no.2125)

次後若能鼻中飲水一抄。此是龍樹長年之術。必其鼻中不串。口飲亦佳。久而用之便少疾病。(大正 54.208c)

30) Vijaya Deshpande は仏典中に現れる金篋の用例として『大日經』(724年訳出)をあげる[Deshpande 2003-04:246]。これよりも訳出年の早いものとして、薛克翹は曇無讖(385-433)訳『大般涅槃經』をあげている[薛克翹 1997:256]。

『大毘盧遮那成佛神變加持經』第二(大正 no.848)

佛子佛為汝 決除無智膜 猶如世醫王 善用以金籌(18.12a)

- 10) 『外臺秘要方』 卷二十一 (四庫全書 子部十三 醫家類一)
- 11) 学訓堂版『醫方類聚』 卷六十四、四十三丁右左
- 12) 学訓堂版『醫方類聚』 卷六十四、四十七丁右
- 13) 学訓堂版『醫方類聚』 卷七十、一百左・百四丁右
- 14) *Suśrutasaṃhita Uttara Tantra* 17.51-83 参照
- 15) 富士川文庫写本『龍樹菩薩論』
白香山病眼詩云。案上謾鋪龍樹論、盒中空捻決明丸。蓋指是書也。
- 16) 季羨林 1994:557、薛克翹 1997: 255、Deshpande 2003-04:245 など
- 17) 『隋書』 卷三十三 志第二十八 經籍三 (四庫全書 史部一 正史類一)
龍樹菩薩藥方四卷、龍樹菩薩和香法二卷、龍樹菩薩養性方一卷
- 18) Vijaya Deshpande は、『外臺秘要方』に『龍樹眼論』の名が言及されていない事から、『龍樹眼論』成立は『外臺秘要方』の成立年である 752 年以降のことであろうと推測している [Deshpande 2003-04:249]。王焘が『龍樹眼論』を知らなかったという事実が、ただちに『龍樹眼論』が存在しなかったことを意味する訳ではないが、『外臺秘要方』以前の医書には白内障の外科手術について説くものはないので、ここではその上限を八世紀に定めた。
- 19) 決明子 (*L.Cassia Torae Semen*) を主成分とした丸薬。中医学における決明子の初出は『備急千金要方』であり、唐代以降に用いられるようになったという [Deshpande 1999:311]。『龍樹菩薩眼論』では「療眼湯丸散煎膏方」中にその処方が説かれている。
学訓堂版『醫方類聚』 卷六十五、五丁右左
- 20) 「どのようにして～しようか」という方法を問う疑問にも、「どうして～することがあろうか」という反語にも読める。いずれの解釈にせよ、金篋を用いた手術は当時それほど一般的なものではなかったように見える。
- 21) ただし前節で確認したように『龍樹菩薩眼論』は「金篋」ではなく「金針」を用いている。
- 22) 明治時代写本影印版『日本国見在書目録』「三十七 醫方家」(『日本書目大成』第一巻、汲古書院,1974):36
- 23) 明治時代写本影印版『日本国見在書目録』「三十七 醫方家」(『日本書目大成』第一巻、汲古書院,1974):35-36
龍樹菩薩和香法一、龍樹菩薩印方一、龍樹菩薩馬鳴菩薩秘法一
- 24) 『医心方』 卷五「治目清盲方 第十四」(横佐知子訳註『医心方』 卷五、筑摩書房,1996)
:131 - 133

——2001a「道教閩山派の研究(一) 閩山派の源流與形成」『道韻』9

——2001b「福建女神陳靖姑の信仰、宗教、祭祀、儀式と傀儡戲『姑娘伝』」『慶応義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』26:32-74

註

- 1) 例えば『スシュルタサンヒター』の註釈書『ニバンダサングラハ (Nibandhasaṃgraha)』は、ナーガールジュナが「改訂者 (pratisaṃskarttāpin)」であることを言明している。
Nibandhasaṃgraha (SS1.1-2) (*The Sushrutasaṃhitā of Sushruta: with the Nibandhsaṃgraha commentary of Shree Dalhaṇāchārya*, Ed. by Vaidya Jādavji Trikamji, 1931):1
yatra yatra parokṣe litprayogas tatra tatraiva pratisaṃskartṛsūtram jñātavyam iti/
pratisaṃskartā 'pīha nāgārjuna eva//
- 2) Winternitz は、仏教、タントラ、医学、錬金術の四人のナーガールジュナの存在を想定している。[Winternitz1933:342-348]
- 3) 『龍樹眼論』には様々なヴァージョンがあるが、本論では全てのヴァージョンを総称する名称として『龍樹眼論』の語を用い、個別のヴァージョンにはその正式名『龍樹菩薩眼論』などを用いている。
- 4) 中医学史の観点から『龍樹菩薩眼論』について言及した研究書は数多くあるが、管見に及んだものを参考までにあげておく。
季羨林 1994: 557-558、薛克翹 1997: 255-256、高健生 2006: 1-2、C. Pierce Salguero 2010: 63-64
- 5) 『醫方類聚』の版本についての情報は以下の論文に詳しい。
真柳誠 1992a, 1992b
- 6) 学訓堂版『醫方類聚』卷六十四、四十一丁右
- 7) 学訓堂版『醫方類聚』卷六十四、四十三丁左
- 8) 『外臺秘要方』卷二十一 (四庫全書 子部十三 醫家類一)
天竺經論眼序一首 隴上道人撰、俗姓謝、住齊州、於西國胡僧處授。
- 9) 『外臺秘要方』以前に成立した医書には白内障の外科手術について説くものはないが、孫思邈『備急千金要方』(652 成立) には「鉤針」を用いた翼状片の外科手術についての言及がある。
『備急千金要方』卷十五 (四庫全書 子部十三 醫家類一) 「治人馬白膜漫睛方」参照

は、宋代の一時期に『龍樹眼論』と同一視されるようになり、『龍木論』という名称で医書中に引用されるようになった。書名から「龍樹」の名称が消えてしまった後も、『龍木論』はナーガールジュナとの関係を保持し、ナーガールジュナを供養すべきことがその中で言明されていた。ナーガールジュナはしばしば「龍樹王」「龍樹醫王」と呼ばれるようになったが、これは「瑜伽教」と呼ばれる密教と巫術が混淆した南宋の一宗教における「龍樹醫王」の信仰を淵源とするものと思われる。道教と高い親和性を有する中医学の歴史の中で『龍樹眼論』が発展を遂げていくのと平行し、ナーガールジュナもまた「龍樹醫王」という尊格へと変容していったのである。

参考文献

- C. Pierce Salguero 2010, *Buddhist Medicine in Medieval China: Disease, Healing, and the Body In Crosscultural Translation* (Second to Eighth Centuries C.E.), A dissertation submitted to Johns Hopkins University in conformity with the requirements for the degree of Doctor of Philosophy
- H.T.Bakker ed. 2000, *A History of Indian Medical Literature IIa*, Egbert Forsten
- Moriz Winternitz 1933, *A history of Indian literature*, vol.2 Calcutta Univ. Press
- Vijaya Deshpande 1999, "Indian Influences in Early Chinese Ophthalmology: Glaucoma as a Case Study" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 62(2): 306–322
- 2000, "Ophthalmic Surgery: A Chapter in the History of Sino-Indian Medical Contacts" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 63(3): 370–388.
- 2003–04, "Nāgārjuna and Chinese Medicine" *Studia Asiatica* 4–5: 241–257.
- 季羨林 1994 「印度眼科医术传入中国考」『国学研究』2, 北京大学出版 :555-560
- 真柳誠 1992a 「宮内庁書陵部に蔵せられる朝鮮古活字本」『漢方の臨床』39 卷 10 号 : 2 – 12
- 真柳誠 1992b 「喜多村直寛による『医方類聚』の復刊」『漢方の臨床』39 卷 12 号 :2 – 8
- 薛克翘 1997 「印度佛教与中国古代汉地医药学」『佛学研究』6 中国佛教文化研究所 :252-262
- 高健生 2006 「導読」『秘傳眼科龍木論』北京 人民衛生出版社 :1-8
- 山野千恵子 2010 『龍樹菩薩伝』の成立問題』『仙石山論集』5:65-86
- 葉明生 1999 「试论“ 瑜伽教” 之衍变及其世俗化事象」『佛学研究』8 中国佛教文化研究所 :256 – 264

然後方静座、片時定自己之氣息。⁵¹⁾

この「龍樹醫王」の呼称は、眼科の医書を介して日本にまで伝わった。日本では室町時代より江戸時代にかけて、眼科の治療方を相伝する諸流派が多数興ったが、そのうち江源流に相伝された『江源流大灌頂錦囊眼科秘録』には、「龍樹醫王論」と呼ばれる書からの引用がみられる。文章は異なるものの、その内容は『秘傳眼科龍木論』に対応している⁵²⁾。

以上のように、「龍樹王」「龍樹醫王」の呼称は、「瑜伽教」と呼ばれる密教と巫術が混淆した南宋の一宗教を淵源とし、そもそも『龍樹眼論』に関連して成立したものではないが、本書が展開していく過程で、この龍樹醫王の信仰が取り入れられ、眼科治療に関連してナーガールジュナを祀ることが行われるようになっていったのである。

まとめ

以上東アジアに伝存する眼科医書『龍樹眼論』に焦点を当て、ナーガールジュナと医術をめぐる伝承の一端を紹介した。各節の結論を今一度、略述すると以下の通りである。

『龍樹眼論』は、「天竺經論眼」あるいは「眼論」を典拠の一つとし、九世紀までに「龍樹」の名を冠する一書としてまとめられた。『龍樹菩薩眼論』自身が「波斯之法、與漢用藥不同、若善調和、功能有驗」と述べているように、本書は西域の眼科術を取り入れたものであり、特に内障の外科手術は、本書あるいは「天竺經論眼」によって、はじめて中医学に齎されたものであった。本書はなぜ「龍樹」の名を冠するに至ったのか。本論では、『龍樹眼論』が成立した時代、ナーガールジュナと医術を関係づける伝承がインドから流入していたことに着目し、同時代のインドにおいてもナーガールジュナと眼科術を関連付ける伝承が存在していた事を指摘した。

『龍樹眼論』は医書という実用書としての性格から増広・発展を繰り返し、宋代に一卷から三巻へと増広したヴァージョンが成立した。おそらく本来『龍樹眼論』とは別書であった七十二種の眼病の細目を持ったこのヴァージョン

訣を捻じる(四指の腹に八卦や七星を配し親指で捻じる)など、巫術と混淆した様相を呈していたという。この「瑜伽教」とは、おそらくは唐代にインドから流入した密教が土着化したものと思われる⁴⁷⁾。南宋の瑜伽教と閩山派の関係を考察した葉明生の論考によれば、ここにあげられた穢迹金剛、龍樹醫王、香山(観音)、華光(五顯神)、那叉太子等の神々は閩山派の道教において重要な尊格となっていたという[葉明生 2001b:50-51]。そもそもなぜナーガールジュナが南宋の「瑜伽教」において「醫王」と称されていたのかは興味深いところであるが、確かな事はわからない。

呉曾の生存年代(十二世紀)、活躍地域(江西、浙江)を考慮すれば、彼のいう「龍樹王菩薩」が上記のような文化背景を持つものであったであろう事は想像に難くない。呉曾が披見した「龍樹王菩薩眼論」は、眼の構成要素を述べるに際し、「天竺經論眼」に説かれるインド由来の四大論を採用せず⁴⁸⁾、『龍木論』同様、中国古来の五臓論を採用していた。道教と高い親和性を有する中医学の歴史の中で『龍樹眼論』が発展を遂げていくのと平行し、ナーガールジュナもまた「龍樹王」「龍樹醫王」という尊格へと変容していったように見える。

眼科術に関連した場面でナーガールジュナを「龍樹王」あるいは「龍樹醫王」と呼ぶ例は、『能改齋漫録』の他にも確認できる。現存する『秘傳眼科龍木論』中には、龍樹に祈願をし、あるいは焼香、供養をすべき事が次のように説かれている。

開時先向中心撥 隨手還當若霧披 既往修來何所作 一生龍樹願依歸⁴⁹⁾

服藥治風兼去熱 還晴丸散是其因 燒香供養龍樹主 覓取來生清淨根⁵⁰⁾

ここでは、「龍樹主」という名称が使われており、「龍樹王」あるいは「龍樹醫王」という名称は見られないのだが、明代に成立したと考えられている眼科の医書『銀海精微』は、手術の前に「龍樹醫王」を供養すべきことを説いている。

凡開金針、須擇吉日、風靜日暖、須待日午之時、焚香請呼龍樹醫王・観音菩薩。

まったようであり、鎌倉時代以降に成立した医書に引用されているのは『龍木論』のみである。一方、朝鮮半島では三十種の眼病の細目を説いた『龍樹眼論』が十五世紀まで伝存し、これが『龍樹菩薩眼論』として『醫方類聚』に収録されたのである。

5 龍樹醫王の信仰

さて、注目に値するのは、宋代の呉曾が『龍樹眼論』の一書を「龍樹王菩薩眼論」と称していることである。仏典の中ではナーガールジュナを「龍樹王菩薩」と称する例は見受けられないが、仏教と混淆した道教の一教派、閩山派では「龍樹王」あるいは「龍樹醫王」と呼ばれる尊格を祀る例が見られる。福建を拠点に浙江、江西、広東及び湖南等に展開したこの閩山派は、巫術を基本としながらも禅、浄土、密教などと融合し、仏教由来の尊格を多数祀るに至った⁴⁵⁾。「龍樹王」あるいは「龍樹醫王」と呼ばれる尊格もその一つであり、その淵源は南宋の「瑜伽教」に認められるという[葉明生 2001b:50-51]。南宋期の内丹派の道士として名高い白玉蟾(葛長庚 1194~1229?)の語録を記した『海瓊白真人語録』は、当時の「瑜伽教」を次のように描写している。

栢問曰。今之瑜伽之爲教者何如。

答曰。彼之教中、謂釋迦之遺教也。釋迦化爲穢迹金剛、以降螺髻梵王、是故流傳此教、降伏諸魔、制諸外道、不過只三十三字金輪穢迹呪也。然其教中有龍樹醫王以佐之焉。外此則有香山・雪山二大聖、豬頭・象華二大聖、雄威・華光二大聖、與夫那叉太子、頂輪聖王及深沙神、揭諦神以相其法、故有諸金剛力士以爲之佐使。所謂將吏、惟有虎伽羅・馬伽羅・牛頭羅・金頭羅四將而已、其他則無也。今之邪師雜諸道法之辭、而又步罡捻訣、高声大叫、胡跳漢舞、搖鈴撼鐸、鞭麻蛇、打桃棒、而於古教甚失其真、似非釋迦之所爲矣。然瑜伽亦是佛家伏魔之一法。⁴⁶⁾

白玉蟾はこれを「釋迦之遺教」と定義してはいるもの、その実践は古来の仏教のそれとは大きく異なり、罡を踏み(八卦や七星の図形に従い足を運ぶ)、

り⁴⁰⁾、また「龍目論十卷」という記載がある⁴¹⁾。これらの事例によって、この時期すでに十巻の『龍木論』が成立していたことが確認できる。なお『万安方』には「龍樹菩薩所造龍木論」という記述が見られ⁴²⁾、この記述から十四世紀の日本では『龍木論』がナーガールジュナ作と見做されていたことが伺える。

次に『福田方』もまた日本で著された医書であるが、『龍木論』の名が見られる。直接の引用はないが、「龍木方ニハ七十二種目病アリ」と述べており⁴³⁾、当時の『龍木論』が、現存の『秘傳眼科龍木論』同様、七十二種の細目を持っていたことを確認できる。

最後の『普濟方』であるが、『龍木論』からの多くの引用が在り⁴⁴⁾、いずれも『秘傳眼科龍木論』の七十二種の眼病中に対応箇所が見られ、文言もほぼ一致する。これによって『秘傳眼科龍木論』の首巻から六巻の部分は、十四世紀には既に現在の形になっていたことが想定される。

以上、目録類に見られる『龍樹眼論』の著録と、医書に引用された『龍木論』の内容を確認した。『龍樹眼論』は、唐代、九世紀までの間に「龍樹」の名を冠する一書としてまとめられた。現存する目録類に見られる最古の記録は九世紀末の『日本国現在書目録』であり、その書名「龍樹菩薩眼経」から本書がナーガールジュナ作と認識されていたことが確認できた。『龍樹眼論』は医書という実用書としての性格から増広・発展を繰り返し、宋代に一卷から三巻、眼病の細目が三十種から七十二種へと増広したヴァージョンが成立した。この七十二種の細目を持ったヴァージョンは本来『龍樹眼論』とは別書であったと思われるが、宋代の一時期に『龍樹眼論』と同一視されるようになった。このヴァージョンは専ら『龍木論』という名称で医書中に引用され、十四世紀には十巻の体裁を持つ書になった。宋代以降の医書からは『龍樹眼論』の名称が消えていき、三十種の眼病の細目を説いた『龍樹眼論』に代わって、七十二種の細目を説いた『龍木論』が流通するようになっていった。

書名から「龍樹」の名称が消えてしまった後も、しかしながら『龍木論』はナーガールジュナとの関係を保持し続けた。鎌倉時代の医書『万安方』には「龍樹菩薩所造龍木論」という記述が見られ、十四世紀の日本では本書が依然としてナーガールジュナ作と認識されていたことが確認できる。なお、九世紀に日本に伝来していた『龍樹眼論』は鎌倉時代にはすでに散逸してし

言及がある。「眼有五輪」と題した雑記の中で呉曾は「按龍樹王菩薩眼論、有五輪、血・風・氣・水・肉、五輪応五臓也」と記している³⁶⁾。ところで多くの眼科の医書は眼病の症状や治療法を述べる前に眼の構成要素等について述べているが、『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』はこれに相当する部分を欠いている。本来これを欠いていたのか、『醫方類聚』が収録しなかったのかは不明である³⁷⁾。一方、『秘傳眼科龍木論』にはこの眼の構成要素についての記述があり、眼の五輪と五臓の関係が述べられており³⁸⁾、その内容は呉曾の記述と一致している。これによって宋代の『龍樹眼論』の一書は、現存する『秘傳眼科龍木論』と共通する眼の五輪の理論を説いていたことがわかる。ちなみにこの「龍樹王菩薩」の名称であるが、後に検討するようにおそらくは道教と混淆した龍樹菩薩の呼称と思われる。

『能改齋漫録』を除いて、宋代以降に成立した諸書の中には「龍樹眼論」という書からの引用は見られないのであるが、代って「龍木論」からの引用は確認できる。ちなみに「龍木論」が引用されている医書は以下の通りである。

- (1111-1118 年頃) 徽宗 (在位 1100 - 1125) 敕編『聖濟總録』
「龍木論」
- (1327 年) 梶原性全 (1266 - 1337) 『万安方』
「龍樹菩薩所造龍木論」「龍木論」「龍目論」
- (1363 年頃) 有隣 (?) 『福田方』
「龍木方」
- (1390 頃) 朱橚 (1361 - 1425) 編『普濟方』
「龍木論」

まず『聖濟總録』には、「肝虚眼」「目内生瘡」「目青盲」「將變内障眼」の項に「龍木論」からの引用が見られる³⁹⁾。現存する『秘傳眼科龍木論』と文章は異なるが、『秘傳眼科龍木論』所載の七十二種の治病方中にそれぞれ対応する内容の記述が確認できる。

次に鎌倉後期、日本で著された『万安方』には『秘傳眼科龍木論』の増広部に当たる巻七所載の薬剤の処方のうち「菩薩散」「鎮肝圓」からの引用が有

「龍樹眼論一卷」

前節で確認した『日本国見在書目録』を含め、多くの目録類が「一卷」としているのに対し、『郡齋讀書志』『後志』と、これに習った『文献通考』は「三巻」としている。『郡齋讀書志』『後志』は「龍樹眼論三巻」の書名に続き、「右佛經龍樹大士者能治眼疾。或假其說治七十二種目病之方」とコメントしているが³³⁾、『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』は三十種の眼病の処方を挙げており、その数が合わない。この七十二種という数はむしろ現在『秘傳眼科龍木論』³⁴⁾として伝わっている書と一致しているようである。

この『秘傳眼科龍木論』はもと『龍木論』という書名で流通していた眼科医書であり、1575年に葆光道人により『秘傳眼科龍木論』十巻として再編された。そのうち首巻から六巻までが本来の『龍木論』の部分であり、それ以降は後に増補された部分である。『龍木論』はその名から類推されるように、『龍樹眼論』の異本の一書として考えられてきた。先行研究によれば、宋代英宗趙曙（在位 1063 - 1067）の時代に、「曙」と同音の「樹」字が避諱字とされたため、「龍木論」と称されるようになったという [高健生 2006:2]。現在の『龍木論』、つまり『秘傳眼科龍木論』の第首巻から第六巻は、『醫方類聚』収録の『龍樹菩薩眼論』と較べてみても分量が圧倒的に多く、眼病の種類も三十種から七十二種へと細分化されている等、内容が大きく異なっており、『龍樹眼論』の異本と見做し得るかどうかは疑問が残る。実際にいくつかの目録は、題目は異なるものの『龍木論』の内容を想起させる諸書の書名を『龍樹眼論』とは別の本として著録しており³⁵⁾、『龍木論』の起源は『龍樹眼論』とは別書にあっただろうことを予想させる。しかしながら『郡齋讀書志』『後志』のコメントによって、『龍樹眼論』の一書が、ある時期に七十二種の眼病の処方を説く眼科医書と入れ替わったことは事実として認められるのである。

さて、次に医書中に引用される『龍樹眼論』の内容を検討し、「天竺經論眼」「眼論』『龍樹菩薩眼論』『秘傳眼科龍木論』と比較し、その内容の異同を確認するのが妥当な手続きであろうが、中国、日本に伝存する医書中に「龍樹眼論」という書からの引用が見つからない。ただ、宋代の呉曾によって著された雑記集『能改齋漫録』（1141 成立）に「龍樹王菩薩眼論」という書についての

科術を取り入れた本書は「龍樹」の名を冠して一書としてまとめられたのである。

しかしながら、なぜナーガールジュナが、殊に眼科術と結びつけられたのかは依然として明らかになっていない。先行研究によれば、金篋により眼の膜を削る外科手術は仏典により初めて中国人に知られる所となったというが³⁰⁾、これもナーガールジュナという人物と眼科術を結びつける十分な根拠とはならない。また、Vijaya Deshpande の主張するように、『龍樹菩薩眼論』と『スシュルタサンヒター』との直接的な関係を認める事は難しいように思われる。ところがインドにもまたナーガールジュナと眼科術を結びつける伝承が存在していた。Vṛnda の『シッダヨーガ (Siddhayoga)』によれば、パータリプトラにはナーガールジュナによって書かれた眼科の処方記された石柱が存在したという³¹⁾。なお Vṛnda はおよそ西暦 800 - 950 年頃の人物と考えられている³²⁾。インドと中国、同時期に、ナーガールジュナと眼科術を結びつける伝承が存在していた事は興味深い事実といえよう。

4 『龍樹眼論』の展開

さて、中国本土で目録類に『龍樹眼論』の名が現れるようになるのは宋代以降である。宋・元代に編纂された目録のうち、管見に及んだものをあげると以下の通りである。

- (1041 年) 王堯臣 (1003-1058) 編『崇文總目』卷七
「龍樹眼論一卷」
- (1161 年頃) 鄭樵 (1104-1162) 編『通史』卷六十九
「龍樹眼論一卷」
- (1295 年) 趙希弁再編『郡齋讀書志』「後志」卷二
「龍樹眼論三卷」
- (1317 年) 馬端臨 (1254 - 1324) 編『文獻通考』卷二百二十二
「龍樹眼論三卷」
- (1345 年) 托克托 (1314 - 1355) 編『宋史』卷二百七

樹菩薩眼論』と対応しない箇所も多く含まれている²⁵⁾。それらは『外臺秘要方』中に引用されていない「天竺經論眼」の部分であるようにも思われるが、「眼論」がいかなる書物であったのか、確かなことはわからない。十世紀の日本には「天竺經論眼」『龍樹菩薩眼論』に類似する記述を含み、単に「眼論」と称される文献が伝存していた。そして「眼論」と称された書と『龍樹眼論』が密接な関係を持っていたことは確かである。

おそらく『龍樹眼論』は「天竺經論眼」あるいは「眼論」を典拠の一つとしたものと思われるが、この眼科の医書は何故「龍樹」の名を冠するに至ったのか。これには、当時のインドと中国の医術の交流、そしてそれに関わるナーガールジュナの伝説を考慮する必要があるだろう。先にも触れたが、唐初に編纂された『隋書』「経籍志」には、「龍樹菩薩」の名の冠する医書が三書、著録されている。これによってナーガールジュナと医術を結びつける伝承は七世紀以前に既に成立していたことがわかる。ではこの伝承はそもそも中国で成立したのだろうか、インドの伝聞を伝えたものであるのだろうか。中国では古くから、ナーガールジュナが天文・地理・図緯・秘識、及び諸道術に通じ、薬術に優れた才能を発揮したとことが語られていたから²⁶⁾、ナーガールジュナと医術を結びつける伝承が中国で独自に成立したとしてもおかしくはない。しかしながら、七世紀には玄奘（602 - 664）や義浄（635-713）が、ナーガールジュナと医術の関係を説く伝承をインドから伝えているのである。『隋書』「経籍志」に著録される医書の中には西域より伝えられたと思われるものが数点確認でき²⁷⁾、隋代より西域との医術の交流が行われていたことが伺えるが、こうした西域との医術の交流に伴い、玄奘や義浄の時代の少し前からナーガールジュナと医術を結びつける伝承がインドから中国に伝承されたと考える事はあながち無理ではあるまい。

インドにおいてナーガールジュナは医術、殊に養生方、長生術に優れた能力をもったと考えられていた。『隋書』「経籍志」は「龍樹菩薩養生方」なる書が存在したことを伝え、また玄奘も『大唐西域記』の中でナーガールジュナが妙薬を服して長寿を保ったとする伝説を記し²⁸⁾、さらに義浄は『南海寄帰内法伝』の中で「龍樹長年之術」と呼ばれる養生法について言及している²⁹⁾。インドからこれらの伝承が流入していたまさにその時代に、インドの眼

れているのが最古の著録である。藤原佐世(847-897)により891-897年頃に編纂されたこの目録は、当時日本に現存していた1579部の漢籍の書目を載録しており、このうち医家に分類される書目に「龍樹菩薩眼經一」とある²²⁾。書名が若干異なるが『龍樹眼論』を指すものと思われる。白居易の詩からは、この「龍樹」の語がかの大乗仏教の論師を指すものなのか、さらにいえば人名であるのかさえ、確かな事はわからないが、『日本国見在書目録』の記録から、九世紀末の日本ではこの眼科の医書がナーガールジュナの作として認識されていたことが確認できる。なお『日本国見在書目録』中にはこの他にも、龍樹菩薩の名を冠した医書を数点確認できる²³⁾。

『日本国見在書目録』に記されているのは書名のみであるので、現存する『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』と同一のものかどうか、その内容は知るべくもないが、これより約一世紀後に成立した『医心方』には「眼論」と称される書からの引用が見られる。『医心方』は丹波康頼(912-995)により984年に朝廷に献上された日本最古の医書であり、現在、中国本土では散逸してしまった医書が多く引用されている。「眼論」もその一つであり、現存する『龍樹菩薩眼論』と一致する記述が見られる。

Vijaya Deshpandeは、この「眼論」を『龍樹菩薩眼論』であろうと言及しているが[Deshpande2003-04:248]、詳細に見てみると、現存する『龍樹菩薩眼論』よりも、文言の上で『外臺秘要方』の中に引用される「天竺經論眼」に近いことがわかる。『医心方』所引の「眼論」から、先にあげた「天竺經論眼」『龍樹菩薩眼論』の対応箇所を以下に示そう。

医心方

眼論云。夫人苦眼無所因起忽然幕、幕不痛不痒、漸々不明、久歷年歲、遂致失明。今觀容狀、眼形不異、唯正當眼中央小瞳子裏、乃有鄣、曖々、作青白色雜、不別人物、要猶見三光、知晝夜、如此者名曰清盲。

此宜用金篦決之。一針便豁然、若雲開見日也。針竟便服大黃丸、不宜大泄、此疾皆從虛熱兼風所作也。²⁴⁾

『医心方』に引用された「眼論」には、現在確認できる「天竺經論眼」や『龍

眼藏損傷來已久	眼藏損傷して このかた已に久し
病根牢固去應難	病根牢固にして 去ること応に難かるべし
醫師盡勸先停酒	醫師盡く勸む 先ず酒を停よと
道侶多教早罷官	道侶多く教す 早く官を罷よと
案上謾鋪龍樹論	案上に漫に鋪く 龍樹論
盒中虛撚決明丸	盒中に虚しく撚る 決明丸
人間方藥應無益	人間の方藥 応に益無かるべし
爭得金篋試刮看	争か金篋を得て 試みに看を刮らん

白居易は白内障に罹っていたのであろう。その症状は、空中に無数の雪がちらつき、ものが薄絹をまとったように朦朧とし、晴れた日も景色はあたかも霧がかかっているかのように見え、春の日でもないのに花が見えると詠われている。続いて、僧の助言や医師の処方もむなしく功を奏さなかったことへの諦念が綴られている。「龍樹論」の名称が言及されているのは、第二首の後四句であり、そこでは、机の上に漫然と「龍樹論」が置かれ、盒中にむなしく決明丸¹⁹⁾が練られて置いてある情景が、この世の処方は無益であるという白居易の思いとともに詠われ、「どうして金篋を得て試みに看（眼膜）を刮ろうか」²⁰⁾と締めくくられている。

さて、文脈からこの「龍樹論」が眼科の医書であろうことは推察可能であるが、単なる仏書であったとも解釈できなくはない。なお、ここで言及されている決明丸と、金篋により眼膜を削る手術は『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』の中でも言及されているが²¹⁾、これらの処方が「龍樹論」の内容を示唆するものかどうか、文脈からは判然としない。このため、この「眼病二首」をもって『龍樹眼論』の成立年を826年以前とすることは、それほど自明の事ではないと云わざるを得ない。しかしながら、「眼病二首」の約七十年後に編纂された目録の中に『龍樹眼論』と類似した書名の著録を見出す事ができるため、これを根拠として遡って白居易の言及する「龍樹論」を『龍樹眼論』と見做すことは可能であるだろう。

現存する目録類の中では『日本国見在書目録』に「龍樹菩薩眼經」と記さ

3 『龍樹眼論』の成立

白居易は「眼病二首」の中で、「龍樹論」という書について言及している。白居易によってこの詩が詠まれたのは、彼が刺史として蘇州に赴任していた825年から826年のことである。江戸後期の多紀元堅はここで言及されている「龍樹論」が『龍樹眼論』であることを言及しており¹⁵⁾、この見解は従来の研究においても支持されてきた¹⁶⁾。このため『龍樹眼論』の成立年を826年以前とすることは先行研究が一致して認めるところである。一方、成立の上限については明らかになっていない。656年に成立した『隋書』「経籍志」には龍樹の名を冠した医書が三書、著録されているが¹⁷⁾、そこには『龍樹眼論』の名称が見当たらない。もちろん、言及の欠如が必ずしも存在の欠如を意味するものではない。『龍樹眼論』成立の上限年はなお考察の余地があるが、おそらく本書が「龍樹」の名を冠した一書として纏められたのは、八世紀から九世紀にかけてのことであったと思われる¹⁸⁾。

さて、白居易の「眼病二首」であるが、そこに言及されている「龍樹論」が、『龍樹眼論』であるかどうかは検討を要する。また『龍樹眼論』であったとしても、現存する『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』と同一の内容を持っていたかどうかとも問題となるだろう。『龍樹眼論』は現在の形になるまで幾度かの編集の手を経ているであろうし、漢籍の中には全く同名の別物もしくはば存在するからである。まずは白居易の「眼病二首」を確認しておこう。

散亂空中千片雪	散乱す 空中千片の雪
朦朧物上一重紗	朦朧たり 物上一重の紗
縱逢晴景如看霧	縦え晴景に逢うも 霧を看るが如し
不是春天亦見花	是れ春天にあらずも 亦花を見る
僧說客塵來眼界	僧説く 客塵眼界に来りと
醫言風眩在肝家	医言く 風眩肝家に在りと
兩頭治療何曾瘥	両頭の治療 何ぞ曾て瘥やさんや
藥力微茫佛力除	薬力微茫にして 仏力除し

黒水凝之作者也。覺晴凝者、卽服湯丸、禁忌慎護、住其疾勢不如重暗。若翳狀已成、非湯藥所及、徒施千方、亦無一効。唯用金針撥之、如發雲見日。¹¹⁾

『龍樹菩薩眼論』において「内障」と呼ばれているこの症状は、「天竺経論眼」においては「青盲」と呼ばれており、『龍樹菩薩眼論』はこれに関連して「古方名清盲」と述べている。また『龍樹菩薩眼論』は「内障」と「青盲」を正しく区別すべきことを他の箇所でも説いている¹²⁾。このことから、現存する『龍樹菩薩眼論』が「天竺経論眼」よりも後に成立したことは間違いなからうが、『龍樹菩薩眼論』がいつごろ現在の形になったのかが不明であるため、『龍樹眼論』と「天竺経論眼」の前後関係をどう見るかは決し難いところである。ただし王燾の記載通り、「天竺経論眼」が胡僧から授った教えを記したものであるのであれば、そこに記された新たな眼科術は他書によるものではないだろう。「天竺経論眼」が『龍樹眼論』に先行するならば、この「天竺経論眼」は『龍樹眼論』の典拠の一つであったものと考えられる。

さて『龍樹菩薩眼論』第五「開内障眼用針法」にはここで言及されている「金篋」あるいは「金針」を用いた外科手術の詳細が説かれている¹³⁾。Vijaya Deshpande は「開内障眼用針法」における手術の手順と、『スシュルタサンヒター』及び『アシュターンガフリダヤ (Aṣṭāṅgahr̥daya)』における手術の手順とを表に示し、その類似点を指摘している [Deshpande2000:383-385]。しかしながら Vijaya Deshpande の表は、『スシュルタサンヒター』の本文に忠実ではなく、また手術の手順についての説明も適宜入れ替えられており¹⁴⁾、『龍樹菩薩眼論』と『スシュルタサンヒター』との間に直接の関係が認められるかは疑問の残るところである。とはいっても、この外科手術がインドより齎されたものであることは中医学の歴史を論じた研究書が一致して認めることであり、「天竺経論眼」は隴上道人が胡僧から授った教えであったこと、また『龍樹菩薩眼論』自身が「波斯之法、與漢用藥不同、若善調和、功能有驗」と述べていることを考慮すれば、両書が西域由来の眼科術を新たに中国に紹介したことに疑いはあるまい。

篇中の第一の眼病「内障」について説明した箇所に見れる。「竜樹菩薩」の名を持ち出して正当性を付与しているのであれば、ここで説かれている内容がこれまで知られていなかった新たな眼科術であったことが想定される。しかしながら、この「内障」についての大きな概要は、王燾（670～755）の『外臺秘要方』中に引用される「天竺經論眼」においても言及されている。しかも、本書とパラレルな表現が見出せるのである。

『外臺秘要方』の撰者、王燾（670～755）によれば、「天竺經論眼」は隴上道人の撰であり、俗姓は謝、齊州の人であるという。そしてこの「天竺經論眼」は隴上道人が西國において胡僧から授ったものであることが記されている⁸⁾。この隴上道人について詳しいことは一切わからないが、「天竺經論眼」に記されている内障の外科手術は唐代以降の医書にはじめて現れるため⁹⁾、隴上道人は王燾の時代よりそう下らない時代の人物と思われる。

『龍樹菩薩眼論』と「天竺經論眼」の対応関係を以下に示そう。「天竺經論眼」と較べ、『龍樹菩薩眼論』は語句の解説や症状の詳しい説明が加わっていることがわかる。

天竺經論眼

皆苦眼無所因起忽然膜、膜不痛不痒、漸漸不明、久歷年歲、遂致失明。令觀容狀、眼形不異、唯正當眼中央小珠子裏、乃有其障、作青白色。雖不辨物、猶知明暗三光、知晝知夜、如此之者、名作腦流青盲。眼未患時、忽覺眼前時見飛蠅・黑子、逐眼上下來去、此宜用金篦決。一針之後、豁若開雲、而見白日。針訖、宜服大黃丸、不宜大洩、此疾皆由虛熱兼風所作也。¹⁰⁾

龍樹菩薩眼論

眼不痛不痒、端然漸漸不明、遂即失眠。眼形不異、唯瞳人裏有隱隱青白色。雖不辨人物、猶見三光者、名曰内障。古方名清盲。非盲今見其有翳如漿水色者是、瞳人豈得清盲者以清淨爲義耳。其眼患者、不覺失明、要須從一眼前患向後、即相率俱損。若預前服藥鎮壓、不爾終損、爲睛不獨迴・獨閉、脉帶相連、故損之爾。三光者日月火之光者也。此狀皆腦中熱風衝腦、腦脂流下灌之然也。亦有黑水自凝結作者、若忽暗二三十日翳或是腦流、若三五日漸漸茫茫者、是

辨諸般眼病疾不同隨狀所療 三十篇（卷六十四 眼論一 所収）

病眼湯丸散煎膏方（卷六十五 眼論二 所収）

第一「眼疾因起」より第四「理誠約」はそれぞれ一丁分ほどの小論であり、全体で眼科術の概要を述べている。「眼疾因起」は眼の疾患の原因の概略を説き、「謬誤失理」は処方への誤りの諸例をあげ、正しい診断の重要性を説き、「應伏宜治」は正しい処方への諸例をあげ、「理誠約」は診断、処方上の注意を説く。

第五「開内障眼用針法」より第七「療眼後禁忌慎護」は、あわせて五丁ほどの論であり、眼科の処方の中でも特に内障の外科手術に焦点を当てている。「開内障眼用針法」は内障の分類法と用いる針の種類、針による手術の詳細を説き、「鉤割及鍼鎌法」は鉤と針の使用方法を説き、「療眼後禁忌慎護」は針による手術後の禁止事項等を説く。

次に第八「治小兒眼條例」は小児科の眼病について補足した部分であり、二丁ほどの論である。眼病治療における大人と子供の区別、また小児の眼病の原因と治療の概要を説く。

『龍樹菩薩眼論』の主な部分を占めているのは、「辨諸般眼病疾不同隨狀所療」三十篇と、続く「病眼湯丸散煎膏方」である。それぞれ十三丁分ほどの論である。「辨諸般眼病疾不同隨狀所療」では三十種の眼病の病名・症状・予後・原因・治療方の詳細を説き、「病眼湯丸散煎膏方」は三十四種の薬の調合とその服用方法を説く。

本文中には先行する医書についての言及がなく、本書がいかにかに成立したのか、その由来を知る手がかりがない。ただし「波斯之法、與漢用藥不同、若善調和、功能有驗」との記載があり⁶⁾、西域由来の眼科術を取り入れていることを言明している。また、本書とナーガールジュナの関係であるが、書名だけではなく本文中にも「此是竜樹菩薩授法盡須敬信」という一文が確認できる⁷⁾。

2 『龍樹菩薩眼論』と「天竺經論眼」、インドの眼科術

「此是竜樹菩薩授法盡須敬信」の一文は「辨諸般眼病疾不同隨狀所療」三十

『龍樹菩薩眼論』版本

一) 衣関順庵版 文化七(1810)年

次に李朝版を底本とした写本に富士川文庫所蔵のものがある。

『龍樹菩薩眼論』写本

一) 丹波元堅写 文政癸酉年

文政年間中(1818～1829)には癸酉の年が存在しないため、正確な書写年代は不明である。丹波元堅とは江戸後期の医学者、多紀元堅(1795～1857)であり、自筆の医書の写本が多数現存している。宮内庁書寮部に所蔵されている李朝版はもと多紀家に所蔵されていたものなので、これを底本としたものであろう。識語には『醫方類聚』より本書を抄出したことが述べられている。また、本書が白居易の詩の中で言及されていること、あるいは『外臺秘要方』に引用される「天竺經論眼」との貸借関係が想定されることなど、貴重な所見が折り込まれている。なお、この富士川文庫本が多紀元堅の自筆の写本であるのか、それを複写したものであるのかは未調査である。

さて『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』は以下のように構成されている。しかしながら『醫方類聚』は下記の順によって『龍樹菩薩眼論』を収録しておらず、それぞれの章は主題別に()内に示した巻に分散して収められている。

- 第一 眼疾因起 (卷六十四 眼論一 所収)
- 第二 謬誤失理 (卷六十四 眼論一 所収)
- 第三 應伏宜治 (卷六十四 眼論一 所収)
- 第四 理誠約 (卷六十四 眼論一 所収)
- 第五 開内障眼用針法 (卷七十 眼論七 所収)
- 第六 鈎割及鍼鎌法 (卷七十 眼論七 所収)
- 第七 療眼後禁忌慎護 (卷七十 眼論七 所収)
- 第八 治小兒眼條例 (卷二百四十二 小兒門四 所収)

1 『龍樹菩薩眼論』の概要

まずは『醫方類聚』所収の『龍樹菩薩眼論』の概要から始めることにしたい。日本に現存する『醫方類聚』の版本には、以下の二種類がある。

『醫方類聚』版本

- 一) 李朝版 1477 年
- 二) 江戸学訓堂（喜多村直寛）版 文久元（1861）年

宮内庁書寮部に所蔵されている李朝版は現存する唯一の初版本とされる。この版は本来 266 巻であったが、現在日本にはそのうち 250 巻 252 冊が伝存している。学訓堂版はこれを底本に欠落部をある程度補足し復刊したものである⁵⁾。

次に、学訓堂版を底本として、戦後刊行された『醫方類聚』に、韓国の東洋医科大学出版、中国の人民衛生出版の二本があり、このほか、台湾の中華世界資料供應出版より東洋医科大学版の重版が刊行されている。

『醫方類聚』出版本

- 一) 京城：東洋医科大学出版 1965 年
- 二) 台北：中華世界資料供應出版社 1978-79 年
- 三) 北京：人民衛生出版社 初版 1982-84 年 改訂版 2007 年

なお日本には『醫方類聚』の版本の他、『龍樹菩薩眼論』と題する写本、版本が数点存在している。これらは『醫方類聚』に引用された『龍樹菩薩眼論』を本来の順序に並べ替えて一書とした輯佚本である。このうち李朝版を底本としたと思われる版本に、江戸後期の眼科医、衣関順庵によるものがあり、岡山大学、台北故宮博物院等に所蔵されている。

『スシュルタサンヒター』の最終章「ウツラ・タントラ (Uttaratantra)」の眼病の処方に関する部分は、伝統的にナーガールジュナ作とされている。ナーガールジュナは西暦の早い世紀に『スシュルタサンヒター』を改訂し、また「補遺の手術」の章を付け加えたと考えられているのである。この事実はインドの眼科術から多くを借用した『龍樹菩薩眼論』を撰した中国人に知られていた可能性があるように見えるが、ナーガールジュナを『スシュルタサンヒター』の改訂者、及びその「ウツラタントラ」の著者であるとして言及しているのは、十二世紀の註釈家ダルハナ (Dalhana) であり、『スシュルタサンヒター』自体やそれ以前の註釈家はそのことについて触れていない。[Deshpande 2003-04:255]

Vijaya Deshpande は、『龍樹菩薩眼論』がナーガールジュナ作に帰せられるに至ったその理由を、中国文化の枠組みの中に求めるべきなのか、あるいはインドから伝わった伝承に求めるべきなのか、確固とした証拠はないとしながらも、『龍樹菩薩眼論』における『スシュルタサンヒター』からの影響を指摘しつつ、後者の可能性を視野にいれるべきことを提案している [Deshpande 1999:321]。

『龍樹菩薩眼論』に『スシュルタサンヒター』からの直接の影響を認めるか否かについては、なお検討の余地があるように思われるが、先行研究が指摘してきたように、本書がインドの眼科術、特に内障の外科手術を取り入れた事は間違いないだろう⁴⁾。本書がナーガールジュナ作に帰せられるに至った理由は、Vijaya Deshpande が主張するように、インドと中国における医術の交流という視点から考察するべきである。その一方、『龍樹眼論』は中医学の歴史の中で独自の発展をとげ、医書という実用書としての性格から増広を繰り返す中、『秘傳眼科龍木論』という一書を生み出すに至った。そしてその発展過程においてナーガールジュナは病氣平癒の祈願対象とされ、「龍樹醫王」と称されるに至ったのである。本論では、この『龍樹眼論』の成立と展開を整理し、またこれに関連して中国における龍樹醫王の信仰についても言及したい。

ナーガールジュナと医術 — 『龍樹眼論』の成立と展開—

山 野 智 恵

はじめに

インドの伝承において、ナーガールジュナはインドの三大古典医書の一つ『スシュルタサンヒター (Sūśrutasaṃhitā)』の改訂者とされている¹⁾。Moriz Winternitzをはじめ、多くの学者はこの『スシュルタ・サンヒター』の改訂者を『中論頌』の作者と区別し、歴史上に複数のナーガールジュナが存在したと考えたが²⁾、ナーガールジュナと医術を結びつける伝承は、インドばかりでなく、中国、チベット、日本にも伝えられている。

本論では、ナーガールジュナと医術の関係を説く伝承を考察するため、東アジアに伝承された眼科医書『龍樹眼論』³⁾を取りあげる。唐代に成立した本書は、十五世紀に朝鮮半島で編纂された『醫方類聚』に『龍樹菩薩眼論』の名称をもって収録され、その版本が現在日本に伝存している。『醫方類聚』は本国ではすでに散逸してしまったため、日本に残された版本をもとに、戦後、韓国・中国でそれぞれ刊行本が出版された。『醫方類聚』の出版によって世に知られるようになった『龍樹菩薩眼論』は、中医学の歴史を論じた研究書の中でこれまでもしばしば取りあげられ、さらに近年、インドと中国における医術の交流という視点から、Vijaya Deshpandeによって関連するいくつかの論考が発表されている [Deshpande 1999, 2000, 2003–04]。その中で、Vijaya Deshpandeは『龍樹菩薩眼論』がナーガールジュナ作に帰せられた理由を考察し、次のように述べている。

幾人かの中国の学者は、『龍樹菩薩眼論』は著名なインド仏教の師であるナーガールジュナに仮託されたものであり、このような仮託の例は中国ではそう珍しい事ではないと指摘しているが、インドの伝統では『スシ